「パイオニア・ガール」から「小さな家シリーズ」への改訂

福　田　二　郎

ローラ・インガルス・ワイルダー（1867-1957）による「小さな家」シリーズは、*Little House in the Big Woods*(1932) から *These Happy Golden Years* (1943) までの８冊連作であり、ローラの記憶の一番初めである大きな森での暮らしに始まり、アルマンゾ・ワイルダーとの結婚までの話に終わっている。ローラ 65 歳から 76 歳の間の出版である。だいぶ年配になってからであるその執筆の動機は、振り返れば自分の人生がアメリカ西部開拓時代を象徴するものであり、開拓民の独立の精神を描き、それを次世代の子供たちに示したかったこと、[1]そして母キャロライン（1924 年没）と姉メアリー（1928 年没）という相次ぐ家族の死を迎え、共に開拓時代を暮らした家族のなかで自分が一番の年長となったとき、その歴史を残したいという気持ちにかられ、最初は「自伝」という形で自分の生涯を書き残しておこうと思ったからのようである。

1910 年代、すなわちローラが 40 代の頃、すでにプロの作家生活を始めていた娘のローズに、ローラは文章を書く手ほどき、編集者とのやりとりの仕方などといった指南を受け、農家の生活を紹介する文章などを書き始めている。[2]そして 1929 年から 30 年にかけて、前述したように自伝作品を書き始め、ローラの幼少期から結婚に至るまでの物語、のちの「小さな家」シリーズの草稿となる “Pioneer Girl” を書き上げた。これは当時ローラとローズの努力にもかかわらず、そのままの形では出版に至らなかった。その後執筆の時期はさだかではないが、ローラはアルマンゾとの新婚生活を描いた “The First Three Years” という作品を書いている。さらにローラ、アルマンゾ、ローズの３人が、農場経営に失敗続きだったサウス・ダコタ州デ・スメットから新たな開拓地を求めてミズーリ州へと旅をするときの日記 *On the Way Home* を書いていた。

「小さな家」シリーズは、“Pioneer Girl” を元にローズの助言や書き直しを経て、改編されてローラが生きている間に８部作として出版され、当時のベストセラーとなり、彼女の名前は全世界に知られることになった。そしてローラの死後に発見された原稿、*On the Way Home* がローズの編集によって 1962 年に出版されている。そして当初 “The First Three Years” として書かれた原稿が編纂されて *The First Four Years* となり、ローズの死後 1971 年になってから出版された。最後に長らくその存在が日の目を見ることがなかった草稿 “Pioneer Girl” が、2014 年になってパメラ・スミス・ヒルの編集によって出版された。これでついにローラが書いていた自らの生涯を記した物語が、すべて揃ったといえよう。

ローラの書いた草稿 *Pioneer Girl* を今読むと、これではとてもベストセラーになるような内容ではないという印象をまぬかれない。優秀な作家であるローズによる編集、ときには母と娘の激しいぶつかり合いとなったやりとりを経た改訂によって、章立てをして８部作に作り上げた「小さな家」シリーズは、はるかに豊かな内容になっている。しかし改訂後の出版された完成品、高い評価を受けた「売れる」作品だけに価値があるわけではない。当時出版されなかった草稿、出版するつもりのなかった *The First Four Years* や *On the Way Home* にも、十分に関心を引く部分がある。

ローラの娘ローズは、祖父チャールズの町での影響力のおかげで通常の子供よりも１年早い、５歳から学校に通うようになり、そこでは教師が一目置くほどの早熟の才能を示していた。その後の学校生活での授業の内容は馬鹿馬鹿しいほどレベルが低かったと言っている。[3]高等学校を卒業して電信技士とし

て働き始めるが、1915 年頃、すなわち 20 代の終わりごろからジャーナリストとして新聞に記事を書くようになり、それからは次々に著作を発表し、名の売れた作家として順調にキャリアを積んでいた。

ローラは長い旅の人生を経たあとで、終の棲家となったミズーリ州マンスフィールドに落ち着いた後、地方新聞に農家の生活や家庭的なトピックを扱ったエッセイを書き始めた。[4]1915 年、サンフランシスコにいる娘に会いに行ったときの夫への手紙には、ローラがローズに文章を見てもらうという話が出てきている。[5]そしてローズが母親を作家として成功させようと本格的に指導を始めるのは、1924 年の手紙にその決意が書かれている。[6]その後ローズはローラに文章の手ほどきを続けるのであるが、ローラが「小さな家」シリーズの草稿となる "Pioneer Girl" を書いたのは 1930 年頃らしい。ローズと親しい関係にあったウィリアム・アンダーソンによれば、ローラの鉛筆書きの草稿を、ローズはタイプし、何度も意見を交わしながら推敲している。[7]残っている手紙や原稿などの資料が公開された今、「小さな家」シリーズは、ローラとローズによる合作だということが明らかになっている。本論では「小さな家」シリーズのどこまでがローラのオリジナルかという問題にはこだわらず、「小さな家」シリーズとして出版されなかった、つまり後年になるまで日の目を見ることのなかったローラのオリジナルの部分を考察し、その改訂の過程から何が見えてくるのかを探ってみたい。

まずは「小さな家」シリーズから見た視点で、草稿 "Pioneer Girl" の特徴を見てみよう。まず冒頭の部分。

> "Pioneer Girl"
> Once upon a time years and years ago, Pa stopped the horses and the wagon they were hauling away out on the prairie in Indian Territory.
> "Well Caroline," he said "here's the place we've been looking for. Might as well camp.[8]

> *Little House in the Big Woods*
> Once upon a time, sixty years ago, a little girl lived in the Big Woods of Wisconsin, in a little gray house made of logs.
> The great, dark trees of the Big Woods stood all around the house, and beyond them were other trees and beyond them were more trees.[9]

「むかしむかし～」と始まるところは同じであるが、"Pioneer Girl" は旅をしてきた開拓民の両親が、開拓地を決めて入植する場面がローラの視点で語られている。この作品は 1 人称で進む「思い出話」の形式をとっており、それが *Little House in the Big Woods* では 3 人称の「物語形式」に変わっているのである。最初にこの草稿を出版社にかけあったときには、ローズの懸命の努力にもかかわらず何度も断られて苦労している。「大人向けの子供の話」は一般受けしないだろうと思われたらしい。

そこでローズは思い切って「子供向けの話」に書き換えることを考えた。ローズは作家として伝記が得意分野だったのだが、それは売れ筋にはなりそうにない。1 人称の思い出話を書きたかったローラは子供の頃、父親の話を聞くのがなによりの楽しみだった。それは大草原の孤立した生活の中、ヴァイオリンの演奏と共に唯一ともいえる娯楽だった。書籍もほとんど手に入らず、夜の団らんには、父親は自分の経験談を話すしかなかっただろう。その原体験が、まずはローラに自分の体験を語らせたのだ。しかしそれは親しい人の昔話だ。例えば我々は自分の祖母や祖父の子供時代の話や経験談を興味深く聞くことはある。だが他人の昔話にはあまり興味をもたないだろう。ローラの話も、読者にとって所詮は無名の人間の自伝というわけである。そこでローズは 1 人称による昔話のノンフィクション形式を、3 人称によるフィクション、つまり「ひとりの女の子」の物語形式に変更することを提案したのだろう。

物語作家ではなく、自分の思い出を残したいと思ったローラからすれば、自分の話に「作り話」を混在させることは当然面白くないはずだ。長い時間、母と娘はうんざりするほどの激論をしたらしい。

残っている原稿を詳細に分析したフレイザーは以下のように述べている。

> More and more, their literary collaboration would become fact-based approach versus Lane's[Rose's] polished, dramatic, and fictionalized one. In Wilder's autobiographical work, "truth" would become a battlefield.[10]

フィクションにすれば、エピソードを豊かにし、波乱万丈で「都合のよい」筋立てを創作しやすい。事実に基づいた伝記は、退屈な内容になりがちである。結局ローズは草稿全体を３人称に変えて、筋立てに脚色を加えるという改編を行った。その結果、*Little House in the Big Woods* は不況にもかかわらず、発売当初から大ヒット作品となった。

では改編の例を見てみよう。*Little House on the Prairie* のクリスマスの章は、大草原の真っ只中で両親が一生懸命に子供たちを喜ばせようと奮闘する話である。マイケル・ランドンによって製作されたアメリカ NBC のテレビシリーズは、世界 140 か国で放映される大ヒットとなり、今でもどこかで放送されている。この 203 回にも及ぶ連続ドラマは 1974 年に開始され、翌 75 年には日本でも NHK で放映されて大人気となった。このシリーズの最初に、パイロット版として約 97 分の作品が製作されている（その後のシリーズは、CM を含めて１時間枠であるが、これは２時間枠である）。この成功によって長いシリーズが始まるのだが、その最初のテスト作品で、大草原のクリスマスの話が取り上げられているのである（ちなみにこの話は原作に忠実であるが、のちのシリーズはほとんど原作とは違う話である）。

人里離れた開拓地での生活では、クリスマスを祝おうにもご馳走やプレゼントを用意するのは困難だ。しかも 12 月の雪に覆われた季節であり、両親にとって遠い町まで出かけて買い物をしてくるのは出来ない相談であった。そこで近所に住む独り者のエドワーズが、子供たちのために雪の中を町まで歩き、凍る川を渡ってプレゼントを持ってくるのである。もちろんそれは自分からではなく、町でサンタに偶然遭遇し、ローラ姉妹のためにプレゼントを預かってきたという作り話。

この章は大草原での厳しい冬の描写に始まり、子供たちがクリスマスをとても楽しみにしているということ、しかしサンタはこの深い雪の中を来ることが出来るのかという心配、両親がなけなしの材料でなんとか盛り上げようとする涙ぐましい努力、そしてエドワーズの驚きの訪問と、それに続く子供たちへのサンタとの遭遇のお話。対して子供たちは矢継ぎ早に質問を浴びせかけ、エドワーズは困りながらも当意即妙のつじつま合わせで返す。子供たちの大喜び、そして両親のエドワーズへの無言の熱い感謝と大団円を迎えるのである。

しかし草稿のローラの１人称の語りでは、そのような脚色が出来ない。ローラは朝に目覚めると、両親のプレゼントの他に隣人のブラウンさんが持ってきたプレゼントを発見するだけである。

> Mr Brown the neighbor from across the creek stood looking at us. He said Santa Clause couldn't cross the creek the night before so left the presents with him and he swam over that morning.[11]

Little House on the Prairie では 15 ページにも渡る独立した章になっているが、草稿ではほんの数行だけだったのである。「サンタが子供たちのプレゼントを預けてよこした」という話は、大人向けであれば読者はほほえましい作り話を推測することになるが、子供向けでは全く不十分と考えられるであろう。

次にまた有名なエピソードであるが、*Little House in the Big Woods* のローラの髪の色についての話だ。茶色の髪のローラは姉メアリーのきれいな金髪に劣等感を持っている。ささいな姉妹の喧嘩の際に姉に髪の自慢をされたローラは、姉の顔を叩いてしまう。父チャールズは、ローラにおしおきをし、しばらくすねていたローラを膝に抱き、"Pioneer Girl" の草稿では自分の子供の頃のお話をしてあげ

るのであった。

しかし *Little House in the Big Woods* では、そのあとに父と娘の会話がつけたされている。ローラは父に言った。

> “You don’t like golden hair better than brown, do you?”
> Pa’s blue eyes shone down at her, and he said, “Well, Laura, my hair is brown.”
> She had not thought of that. Pa’s hair was brown, and his whiskers were brown, and she thought brown was a lovely color.[12]

草稿の思い出話だけでは、このような感動を生み出さなかったであろう。この会話は、おそらくはローズによる創作である。[13]ヒット作のシリーズから見れば、草稿は量もずっと少ないシンプルな作りであった。

以上２つの例を見たが、エドワーズがサンタと会ったときのことを子供たちに語る生き生きとした描写、ローラを慰めるチャールズの語りなど、会話を多用して改編されたシリーズはドラマチックで臨場感のある物語になっている。一方で草稿では素朴なエピソードの連なりになっている。シリーズが読者が活字を追う「本」の形式で、草稿は年寄りの語る「お話」という形をとっているのである。

次に子供向けの方針に変更した際の改編を見てみよう。“Pioneer Girl” は章立てもなく、ローラの小さな頃から結婚に至るまでの自伝形式の話になっている。それが「小さな家」シリーズに改編されたときには、アルマンゾの少年期の話を加えて８冊の章立てをした本になった。量にすればかなり増やしていることになる。全体を増やしているのに、それでもカットされた部分がある。まずは子供向けには相応しくないと判断したであろう例を挙げよう。

ひとつには、残酷であったりグロテスクであったりする場面だ。大草原に雷を伴う嵐が襲った後、見知らぬ二人の幼い少年がおびえた様子でとぼとぼと歩いてくる。町の娘が話しかけても答えない。ようやくわかったのは、一家全員が町から２マイルも離れたところで「眠っている」ということだった。雷に打たれたのである。父親はあとから意識を取り戻して九死に一生を得たが、子供たちの母親、叔母とその連れ合いも死んでしまった。

> The boys would not talk about it and for a long time would just sit and stare at nothing. Even yet they would not play, but wandered around the house and still seemed strange and frightened.[14]

このような痛ましい事件は、開拓地ではひんぱんにあったことだろう。幼児死亡率はとても高く、医療や福祉制度は整備されておらず、自然災害は熾烈で、ローラはそのような生活環境について、多くの体験を書き残している。自身の開拓民としての人生、その経験を残そうと思って書き始めた伝記であるから、最初は思い出したことをできるだけそのままに書いていったはずだ。しかし「子供向けの物語」に改編する際、家族を失い路頭に迷って生き残れるかわからないような少年たちのエピソードは、やはり残すのははばかられたのであろう。

またインディアンの赤ん坊の遺体が吊るされてミイラになっており、それを白人が持ち去ってしまい、大きなトラブルに発展してしまう話もシリーズには残されていない。[15]こういった子供向けにはふさわしくないと削除されたエピソードは、当時の開拓地の様子を記録する昔話としては十分に価値あるものである。このような体験談は、おそらくは当時家庭内では語り継がれていたのであろう。

次に削除された例として、男女関係の話である。シリーズでは恋愛関係の話はほとんど出てこないのは、子供向けの物語として当然かもしれない。ローラがアルマンゾにアプローチされるのも、集会のあとに送ってゆくという申し出からで、その後は馬車でドライブするというデートが続く程度である。ローラが思春期になる *Little Town on the Prairie* では、町で企画される親睦会や文芸会といった様々な催しのエピソードが描かれており、それはもちろん若い男女の重要な出会いの場となっていたはずなのだ。

“Pioneer Girl”では、そういう場面の話が多い。ローラの家に若い弁護士が男女の集う催しへ誘いにやってくるエピソードがある。ローラはまだ 10 代のなかばで、それが彼女にとって初めての男性からの誘いであったのだが、父のお眼鏡にはかなわなかったらしく、まず父親から誘った弁護士はあっさりと断られてしまった。

> So Mr Thomas went away alone and then Pa laughed at me and said all Thomas had come for was to take me. I had refused my first offer of an escort and I was indignant. If he wanted to take me why couldn’t he say “Come go with me!” and not be such a coward. Not that I wanted to go with him, but I hated to miss the fun and now Pa and I couldn’t go, but sat home all the evening.[16]

その頃に成年男子が 10 代の少女を直接誘ったら、それこそ父親に怒られてしまったかもしれない。弁護士は礼儀というか配慮をもって、まずは父親を誘ったのであろう（実はアルマンゾも、ローラを誘う際にはまず父親の許しを得る方法をとっている）。しかしローラは弁護士の態度を「臆病者」と批判したのであった。

また若者たちの間ではよくパーティーが開かれ、そこでは男女の楽しみを盛り上げるダンスやキスゲームといった遊びが流行っていた。

> The next week Ernest came for me again. This time I liked the crowd and the kissing games less than before. I went through the square dances better with Ernest’s help but Jennie and Gaylord spoiled them for me by the remarks they made about us.
>
> Going home, Ernest pulled the robes higher around me and forgot to take his arm away. I was too shy and embarrassed to do anything about it but I made up my mind not to go again.[17]

冷やかされたローラは頑なになった。若者にありがちなエピソードであるし、肩にかけた手は、はずすのを「忘れた」はずがない。思春期の男女のからみは、子供向けではないと削除された例である。シリーズでは、アルマンゾ以外の男性はほとんど「相手」として出てこないが、やはりそれなりに様々な恋愛や求婚にまつわる出来事があったのだ。[18]

ローラが 10 代になった頃、インガルス一家はウォルナット・グローブの町で様々な仕事を親子共にしていた時期がある。この時期は、子供向けの話として、そして「開拓の物語」としてはふさわしくないと考えたのか、シリーズではほとんど削除されている。インガルス一家が働いていたホテルと商店のオーナーの家族には、妻を銃で撃ったこともあるという荒くれ物のウィルいた。そのときローラは、オーナーの家の病気の娘ナニーを看護していた。

> I hadn’t stayed with Nannie very long when one night I waked from a sound sleep to find Will leaning over me. I could smell the whisky on his breath. I sat up quickly.
>
> ‘Is Nannie sick,’ I asked.
>
> “No,” he answered. [“]lie down and be still!”
>
> ‘Go away quick,’ I said, ‘or I will scream for Nannie.’
>
> He went and the next day Ma said I could come home.[19]

さすがに少女が強姦されそうになったエピソードは、シリーズでは削除された。

この逸話には、当時の開拓地の負の面が隠されている。フロンティアの時代には、女性の仕事は極めて限られた範囲でしかなく、ローラもその母も従事した教職、もうひとつが売春婦といった選択肢が主な職業であった。19 世紀の中頃には、女性人口の数パーセント、働く女性の 5 人に 1 人が売春の仕事に関係していたという調査もある。[20]ローラがその存在を知らないはずもなく、自身が経験した「典型的なアメリカ開拓の歴史を残したい」という自伝の執筆の動機もあったはずなのだが、この問題に関し

ては “Pioneer Girl” の草稿にも触れていない。そういった負の存在をないものとする典型的なピューリタニズムの表れと見ることもできよう。

開拓時代には男性に比べて女性の割合が極端に少なかった。ローラの生まれたのは1867年であるが、その少し前の 1850 年には、西部オレゴン州のポートランドでは男女比が３対１であり、カリフォルニア州では男性の人口が 90％を占めていたというデータがある。ゴールドラッシュのサクラメントでは、女性の焼いたビスケットが１枚 10 ドルで売れたという逸話も残っている。[21]アルマンゾがまだ十代のローラに熱心になった理由のひとつには、西部開拓地には女性の争奪戦があったという背景も忘れてはならないだろう。

次に、開拓民としての生活を脚色していた例を見てみよう。あえて「脚色」というのは、草稿である “Pioneer Girl” はローラが子供の頃を思い出すがままに書き連ねた「自伝」と言ってもいい作品であるが、それを「物語」に改編した「シリーズ」との違いを見てみれば、のちにローラとローズが伝えたかった狙いが浮き彫りになってくるからである。

この作品の冒頭は、幼少のローラの最初の記憶であるキャンザスやウィスコンシンといったインディアン・テリトリーに隣接、またはテリトリーに不法に入り込んだ土地での生活から始まる。開拓の初期は農民というよりは狩猟の生活だ。“Pioneer Girl” ではそういった生活の中でも、インガルス一家の子供たちは学校へ行っている。しかし *Little House in the Big Woods* ではそういったエピソードがカットされている。“Pioneer Girl” ではローラたちは近隣の親戚の家に遊びに行くが、そこに住む家族には５人の子供たちがいる。その子供たちが通う学校の生徒たちは、みなスウェーデンからの移民グループだ。[22]開拓時代には様々な国から来た移民のコミュニティーが散在していて、お互いの生活上の距離感や意思疎通に苦労していた面があり、それもまた記録すべき興味深い点であるのだが、「小さな家」シリーズでは削除されている。このように改編されたシリーズでは量が格段に増えているにもかかわらず、登場する人物はだいぶ減らされている。さらにアンダーソンやフレイザーの執念ともいえる綿密な実地調査によれば、実際にインガルス一家が住んでいた場所と町や隣人との距離は、物語で書かれているよりもだいぶ近かったことが判明している。つまりシリーズでは「人里離れた場所での開拓」という環境が誇張されているのである。

シリーズ６作目となる *The Long Winter* は、開拓地での厳しい冬の経験を扱ったシリーズの中でも異色の作品となっている。草稿の “Pioneer Girl” で対応する部分の何倍にもなる量になっており、改編というよりはわずかな草稿を元にほとんど新たな創作をしたと言えるものだ。寒さや飢えと闘う壮絶な描写は、執筆時に娘のローズに子供向けのシリーズとしてふさわしいものかどうかの葛藤を手紙で語っている。

> It is a rather dark picture, not so much sweetness and light as the other books, but the next one will be different so perhaps the contrast will not be bad.[23]

「長い冬」というタイトルの通り、この物語のなかでは零下 20 度を下回る猛吹雪が 10 月にやってきて、零下 40 度まで下がる冬は 5 月まで続いた。石炭や薪はなくなり、最後には擦り切れる手で干し草をねじって燃やし続け、食べ物はなくなって種麦をコーヒー・ミルで挽き続けながらインガルス一家は長い冬を凍死と飢え死に一歩手前で耐え続けた。生き延びるための一家の孤独な闘いは、西部開拓地の孤立した生活の厳しさを際立たせている。

しかし “Pioneer Girl”、つまりローラの思い出話では、以前の知り合いの息子ジョージ・マスターズと、スコットランド人の妻マギーという二人の居候が同居していたのである。その妻はそこで早すぎる出産をするというわけありの夫婦であった。ジョージは干し草をねじる手伝いをしようともせず、しかも滞在費を払いもしないのでローラはだいぶ不愉快に思っていたようだ。

ローラはローズへの手紙で、「長い冬」のなかに出すべき人物について相談している。ここでローズ

は好人物のエドワーズやボーストを登場させようと提案したようである。しかしローラは反対していた。

> We can't have anyone live with us unless they are mean people who would not help as the Masters were, or the hardships will mostly vanish.[24]

結局長い冬の厳しさを強調するために、インガルス一家の孤立感を減じる同居人の存在は削除するという結論に至ったようである。

さらに *The Long Winter* では、"Pioneer Girl" の草稿に対して、アメリカの伝統的な価値観に対するローラの葛藤が加えられている。厳しい冬が来る前、インガルス一家は秋の刈り入れ期に農機具を買い入れ、収穫の手伝いに人を雇うどころか、日々の食事も制限しなければならない状態で、チャールズは空腹の状態で必死に働いていた。"Pioneer Girl" では、その描写はすぐに終わり、チャールズが町で大工仕事をするという話に変わるが、それは *The Long Winter* では削除されている。チャールズが町で様々な仕事をするエピソードは後のシリーズではほとんど削除されており、そのことに関しては後述する。

刈り入れの場面に戻るが、ひとりで奮闘している父親を見かねて、ローラは手伝いたいと申し出る。チャールズは最初ためらって断るが、ローラの熱心な気持ちに動かされ、実際はとても助かるのでやってもらうことにしたのだ。ローラは早速母親にそれを報告するが、キャロラインは内心賛成できないのであった。

> "Why, I guess you can," Ma said doubtfully. She did not like to see women working in the fields. Only foreigners did that. Ma and her girls were Americans, above doing men's work. But Laura's helping with the hay would solve the problem. She decided, "Yes, Laura, you may." [25]

アメリカ人の女性は、男がするべき力仕事をするのが恥だというわけだ。インガルス一家を含めて西部の開拓民はすべて移民のルーツを持つわけだが、ここで「外国人」というのは、当時あちこちにいた「最近移民してきたばかりの英語がおぼつかない人たち」という意味であろう。ともあれアメリカで生まれた２世や３世である「アメリカ人女性」は、「野良仕事などはせず、しとやかにしているべきだ」というのがキャロラインの信条なのであるが、彼女は一家の危機的状況にやむを得ず娘の畑仕事の許可をする。思春期にさしかかったローラは、そのような因習的な価値観に反発を覚えるのである。

ローラは姉のメアリーと違って活発な少女であるから、外で遊ぶのは好きだし農作業にも関心がある。しかし女性がするべきとされている仕事は嫌いだ。裁縫などはもっとも嫌いな作業である。

> Mary had liked such work, but now she was blind and could not do it. Sewing made Laura feel like flying to pieces. She wanted to scream. The back of her neck ached and the thread twisted and knotted. She had to pick out almost as many stitches as she put in.[26]

当時の文化的価値観を重んじるキャロラインは、ローラに裁縫をするように厳しく命じる。それが女性としての「正しいたしなみ」だからである。ローラは小さい頃からずっと裁縫に苦しむのであるが、大きくなってから驚く発見をする。それはメアリーが都会にある盲学校に行く準備で、たくさんの服を準備しているときであった。

> Laura had never before known that Ma hated sewing. Her gentle face did not show it now, and her voice was never exasperated. But her patience was so tight around her mouth that Laura knew she hated sewing as much as Laura did.[27]

母親は顔にも声にも出さないが、口元を見て、その忍耐強く子供の前では立派な母親を演じる姿の裏に、実は裁縫が嫌いな母の本心を見たとローラは

思ったのである。

そんなしつけに厳しい母は、教育熱心で、チャールズが町や学校のない開拓地に行きたいという希望にはずっと反対であった。*The Long Winter* では、あまりに冬が厳しいので、一家は町で過ごすことにし、そうなると子供たちは学校に行くことになる。

> "You and Carrie'll be going to school tomorrow." Her voice was glad.
>
> Laura did not say anything. No one knew how she dreaded meeting strangers. No one knew of the fluttering in her breast and the gone feeling in her stomach when she had to meet them. She didn't like town; she didn't want to go to school.
>
> It was so unfair that she had to go! Mary wanted to be a schoolteacher, but she couldn't be because she was blind. Laura didn't want to teach, but she must do it to please Ma.[28]

母は「文化」のある町で娘たちに学校へ行かせ、当時女性として唯一「立派な」職業である教員の仕事をしてほしいと願っている。父と同じく開拓の仕事が好きで、他人と交わることに恐怖さえ覚えるローラであるが、そんな母の期待に背くことはできない。

不安の中で学校に行くと、男の子たちがボール投げをしている。ローラは飛んできたボールを思わず見事にキャッチしてしまい、喝采を受けて遊びに誘われる。しかしローラは断り、傍らに立っていた女の子たちの視線を気にするのであった。

> Those girls would not play with boy, of course. She did not know why she had done such a thing and she was ashamed, fearful of what these girls must be thinking of her.[29]

大人のしつけは子供たちに浸透しているだけではなく、子供たち同士でも、お互いの振舞いを意識しあい、縛り合う構図が出来てしまっている。また休み時間では、男の子たちが氷の上で遊んでいる姿を窓から見ていて、ローラも一緒に遊びたいと思う。

> "I wish we weren't too big now," she said. "I don't think it's any fun being a young lady." [30]

この頃ローラはまだ小学生の年であり、もうすでに「レディー」であることのたしなみが重視されていたのだ。

服装のコードも厳しい。特に暑い日でも、女の子はボンネットをかぶり、首、手首、足首まできっちり覆い、腰をきっちり締める服を着せられるので汗疹との闘いだ。冬も近い日のため、厚着をさせられてフランネルの下着を着せられるのは、大変な試練だった。

> But when Monday came Laura was cross because her red flannel underwear was so hot and scratchy.
>
> It made her back itch, and her neck, and her wrists, and where it was folded around her ankles, under her stockings and shoe-tops, that red flannel almost drove her crazy.[31]

薄い下着に代えさせてほしいというローラの嘆願にも、母は許してくれず、ローラはかゆみで勉強どころではない苦行を強いられた。これまで女の子のあるべき姿について、母による娘への圧迫例を取り上げたが、これらはすべて "Pioneer Girl" には書かれておらず、「シリーズ」に改編する際に加えられたものだ。つまりこういったアメリカの保守志向、因習的道徳観へのアンチテーゼは、のちに意図的に挿入されたテーマのひとつといえよう。

意図的に挿入されたテーマと言えば、重要なのは「自由と独立」である。「独立」はしばしば「自給自足」ということを意味している。この言葉が最初に出てくるのはシリーズ２作目、ローラの夫になるアルマンゾ・ワイルダーの少年時代を描いた *Farmer Boy* の最終場面であり、それはローラの話ではないから、当然 "Pioneer Girl" の草稿にはない部分である。

物語最後のクライマックスで、アルマンゾ少年が父親のような農民になるか、町の馬車工場で職人になるかの選択を迫られたとき、父親は息子を諭す。

You'd have to depend on other folks, son, in town. Everything you got, you'd get from other folks.

"A farmer depends on himself, and the land and the weather. If you're a farmer, you raise what you eat, you raise what you wear, and you keep warm with wood out of your own timber. You work as you please, and no man can tell you to go or come. You'll be free and independent, son, on a farm." [32]

この作品は "Pioneer Girl" の草稿から３年ほどを経て、娘のローズとの議論を通して新たに書き下ろされたものである。ゆえに意識的にこのようなキーワードが挿入されたと考えられる。ここでは誰にも頼ることのない独立した農民のプライド、農民生活への賛美が読み取れるように思える。しかし実はそうとは言い切れない。

「小さな家」シリーズはローラの結婚に終わる *These Happy Golden Years* までが出版され、それでこの物語は完結すると考えられていた。しかし実は結婚後に娘のローズが産まれた生活を描いた草稿が存在していた。それはローラの死後どころかローズの死後に、原稿を形見として渡された人物が、*The First Four Years* というタイトルで出版した。[33]この草稿は、ローラとアルマンゾが婚約しているところから始まる。そのときローラは農民と結婚することは望んでいなかったと話し出す。

"I've been thinking," she said. "I don't want to marry a farmer. I have always said I never would. I do wish you would do something else. There are chances in town now while it is so new and growing."

Again there was a little silence; then Manly [Almanzo] asked, "Why don't you want to marry a farmer?" And Laura replied, "Because a farm is such a hard place for a woman. There are so many chores for her to do, and harvest help and threshers to cook for. Besides a farmer never has any money.[34]

このあとで、アルマンゾは父親の言ったように、商人の生活は楽な生活をして金儲けが出来るかもしれないが、それは農民に生活の糧を依存している上でのことであるし、なにより農民は「独立している」とローラを説く。しかしローラはあまり納得していない。旅を続けることを愛する「開拓民」を志向するローラは、ひとつ所に留まる農民生活がどうも好きになれなかったようである。

The Long Winter に戻ろう。ローラは干し草刈りの手伝いをしているときに、ジャコウネズミの巣を見つける。例年より厚く造られた壁を見て、チャールズは今年の冬は寒くなるだろうと予想する。なぜジャコウネズミがこの冬が寒くなるのかを知っているのか不思議に思ったローラは、父に尋ねる。それは神様が知らしているのであろうと父は答えた。それではなぜ人間には知らせないのかと質問を続けると、父は以下のように答えるのだ。

"Because," said Pa, "we're not animals. We're humans, and, like it says in the Declaration of Independence, God created us free. That means we got to take care of ourselves." [35]

ここでの「自由」とは、独立宣言にも言われているように、「人は自分で考えて自立した生活を送らなければならない」という意味だ。この「自由と独立」というキーワードは、このあとで２度出てくる。１度目はアルマンゾの口からで、長い冬の間に町全体の食料が尽き、このままでは全滅の可能性もあるというとき、40 マイル離れた土地に小麦を持っている男がいるらしいという噂だけをたよりに猛吹雪の中、その男から小麦を買いに行こうというときである。

自殺行為ともいえるような冒険に出かけようとするアルマンゾを、兄のロイヤルはやめるよう説得する。

"Almanzo," Royal said solemnly, "if I let you lose

your fool self out on these prairies, what'll I say to Father and Mother?"

"You tell 'em you had nothing to say about it, Roy," Almanzo answered. "I'm free, white, and twenty-one . . . or as good as. Anyway, this is a free country and I'm free and independent. I do as I please.[36]

ここでのアルマンゾの言い分は、「もう子供ではないのだから、自分の判断は自分で決められる」という意味だ。しかし無謀な行為に出ようとしている言い訳に「自由と独立」というのは、少し無理がなかろうか。作者のローラ（ローズの意向の可能性もある）が挿入したかったキーワードであることが伺える。

次にアルマンゾが小麦を手に入れることに成功し、帰ってきたときのことだ。小麦の買い付けに出資した商人のロフタスが、食料がなくなりつつある人々の足元を見て、法外な値段を要求した。怒った人々を前に開き直るロフタスとチャールズの会話である。

"That wheat's mine and I've got a right to charge any price I want to for it."

"That's so, Loftus, you have," Mr. Ingalls agreed with him. "This is a free country and everyman's got a right to do as he pleases with his own property." He said to the crowd, "You know that's a fact, boys," and he went on. "Don't forget every one of us is free and independent, Loftus. This winter won't last forever and maybe you want to go on doing business after it's over."

"Threatening me, are you?" Mr. Loftus demanded.

"We don't need to," Mr. Ingalls replied. "It's a plain fact. If you've got a right to do as you please, we've got a right to do as we please. It works both ways." [37]

ここでのチャールズの言い分は、「ふっかけるのも自由だが、冬が終わってから我々がどういう行動を取るかも自由だぞ」というものだ。これが意味するのは法の下での公平性、そしてその範囲内では何事にも縛られることはないというアメリカ的発想である。つまりローカルな習慣や道徳性（例えば人情といったもの）の効力を最小限にとどめる行動の「自由」だ。

誰にも指図されることなく、自分の世話は自分でするという意味での「自由と独立」という考え方は、厳しい自己責任を伴う。アルマンゾが猛吹雪の中を探し回ってようやく小麦の持ち主を探し出したとき、その持ち主は飢え死にしかかっている人々の話を聞いてもまったく同情せず、翌年のための種麦を売ろうとはしなかった。

"That's not my lookout," said Mr. Anderson, "Nobody's responsible for other folks that haven't got enough forethought to take care of themselves.[38]

この冷酷ともいえる厳しい返答に対してアルマンゾも情に訴えることは考えもせず、ビジネスとして上乗せした金額を申し出て小麦を手に入れたのだった。

以上のように、シリーズに改編されてから繰り返し現れる「自由と独立」という言葉の意味は、自給自足で暮らす農民生活だけにとどまらず、他人からの指図は受けないという自己決定権の尊重、厳しい自己責任に基づいた生活観といったものが含まれており、それはおそらくすべてを１から始める開拓民精神が根底にあるのだと思われる。

そういった視点から見れば、ローラが自分の経験した開拓時代をありのままに記録しようとしたこのシリーズのなかで、あえて書かなかった事実が浮かび上がってくる。開拓民が流入するフロンティアの時代は 1880 年代で終わりを告げ、開拓は農場経営の時代に入っていた。「小さな家」シリーズでも書かれているように、その仕事は失敗と苦労の連続であった。

ローラの子供時代である 1870 年代から 90 年代

にかけて、アメリカ西部はイナゴの大発生、度重なる激しいブリザード、広範囲に渡る大火事、7年間も続いた干ばつと、大規模な自然災害の連続であり、それは「小さな家」シリーズでも描かれている。農牧業を振興するためにリンカーンが署名して 1862 年から始まった“The Homestead Acts”（自作農場法）は、開拓民に無償で土地を与え、5年間で農地経営の実績を作ればその土地の持ち主になれるという法律で、主にミシシッピ川より西、アメリカ全土の10％にも及ぶ範囲で 160 万件の認可が下り、チャールズやアルマンゾもその参加者である。しかし上記の自然災害の影響を受け、二人とも成功していない。そもそもその成功者は少なく、多くの農民は脱落していったのである。数少ない成功例は、近代設備を導入し、専門の経営者によって運営される大規模な農場だった。[39]

農地取得に失敗した農民たちは、急速に発展しつつある町で仕事を得るしかなかった。破産状態の人々は馬車で西部を彷徨い、町ではホームレス、失業者、飢えがはびこり暴動も起こっていたが、“Pioneer Girl” にもそれらの描写はない。シリーズ最終巻の *These Happy Golden Years* では、メアリーを盲学校に行かせるためにローラが教員の仕事や裁縫の仕事に奮闘するが、実際には家族が生きてゆくために、チャールズは農地からの収入では家族を支えることができず、町での大工や肉屋の仕事、そしてホテルでの仕事をしていた。それは農民としては暮らしが成り立たない当時の状況のありふれた光景だったのだが、シリーズではほとんど削除されている。さらにローラは知らなかったらしいが、チャールズは生活困窮の申請をし、政府から援助も受けているのである。[40]

ローラとアルマンゾが新生活を始めた様子は、前述した死後出版の *The First Four Years* に書かれている。そこでは農地取得に失敗し、火の不始末で家まで失うところで話は終わる。その後ローラとアルマンゾは残りの財産をかき集め、新たな土地を求めて旅を始める様子を、ローラは旅日記に記した。それをローズが回想する形で編集した *On the Way Home* の冒頭は、7年間続いた不作に人々は借金に首が回らなくなり、銀行もつぶれる恐慌が起こって国中が大混乱になる様子から始まる。[41]こういった社会背景の描写は、ローラが生きた西部開拓の歴史を描くには重要な事実であると思えるのだが、その手前で「小さな家」シリーズが終了するというのは、西部開拓史の負の面を意識的に削除していると思えないか。

以上ローラが執筆した “Pioneer Girl” からローズが産まれたあとまで続く草稿全体から見て、「小さな家」シリーズはローラの結婚に終わる大団円で形を整えているように思われるが、「自由と独立」をひとつのテーマに挿入しつつ改訂した際、開拓民生活の実態にバイアスのかかった脚色を加えた構図が見えてくる。ローラの草稿が公表されて、ローラの執筆に当時プロの作家であったローズの改訂が明らかになり、さらにローラとローズの書簡が公表されてシリーズの完成は二人の共同作業であったことが明らかになった今、二人の改訂にどのような思想的背景があったのかを確認する必要がある。そこに見られるのは色濃いリバタリアニズムであった。

シリーズ執筆の 1930 年代は、ルーズベルト大統領がニューディール政策を展開した時期とぴたりと重なっている。ニューディールとは、恐慌を克服するためにそれまでの自由主義的方針から、政府による市場介入や経済政策を積極的に行うという転換である。政府は失業者への手当給付や生活保護という政策に続けて、大規模公共事業を拡げて雇用の拡大を促し、景気回復を画策した。それは従来の政府の権限を制限する自由経済・自己責任の社会から、社会主義的方向へ向かう「大きな政府」への方向転換であった。

経済発展の促進には政府による干渉を極力少なくし、自由放任のほうが効率がいいという面がある。またアメリカの西部開拓時代は、自分たちが頑張った分だけ自分のものになるという環境だったのだから、政府による規制はできるだけ少なくするのが当たり前の価値観だったのであろう。しかし弱肉強食のシステムでは貧富の差の拡大、社会を不安定にする弱者の増加は避けられないし、大規模な災害や経済恐慌が起こったときには、自由放任では何の対策

も取れないことになる。というわけで国を二分するような議論の末、政府が市場に積極的に介入し、広く集めた税金を様々な形で再配分しようというニューディール政策が施行されたのである。

フェルマンによれば、「レイン（ローズ）が主張するところによると、彼女の母は小さな家シリーズがニューディールの批判になることを特に意図していた」という。[42]どうやらローラとローズは、明確にニューディール政策には反対だったようである。*The Long Winter* には、以下のように政府の介入に対して否定的な主張が出てくる。

アルマンゾは当時 19 歳であったが、21 歳と年齢を偽って農地申請をしていた。農地を開拓する力さえあれば、それは政府が望むことでもあるのだから、法律による年齢制限といったものは守る必要などないと思っているのだ。

> Anybody knew that no two men were alike. You could measure cloth with a yardstick, or distance by miles, but you could not lump men together and measure them by any rule. Brains and character did not depend on anything but the man himself. Some men did not have the sense at sixty that some had at sixteen. And Almanzo considered that he was as good, any day, as any man twenty-one years old.[43]

ここに見られるのは人々の行動を制限する形式的な法律を軽視し、「自由と独立」を重んじる徹底した個人主義である。

またインガルス一家のところに友人のエドワーズがやってくるエピソードが挿入されている。税金の取り立てに役人がやってきたから、彼はその土地は離れてさらに西へ移住する途中であった。

> "I'm aiming to go far West in the spring," he said, "This here country, it's too settled-up for me. The politicians are a-swarming in already, and ma'am if'n there's any worst pest than grasshoppers it surely is politicians. Why, they'll tax the lining out'n a man's pockets to keep up these here county-seat towns! I don't see nary use for a county, nohow. We all got along happy and content without 'em.[44]

町が出来て国が整備されてゆくには、それを統括する官僚システムと、それを運営する税金が必要になるわけだが、それはエドワーズにとっては害をもたらすイナゴよりひどいものだというのである。

アルマンゾ、エドワーズのエピソードは "Pioneer Girl" にはない。これらはローラの自伝とは違った様相のもので、シリーズを書く際にローラとローズで書き加えた思想的色彩の濃い内容といえよう。

1931 年にローラはアルマンゾと二人で、シリーズの舞台となった 40 年前の開拓地に里帰りの旅をした。それは "Pioneer Girl" を書き上げた翌年で、それを改訂したシリーズ 1 作目の *Little House in the Big Woods* が出版される前年のことであった。その旅の途中、重い税金が払えずにあちこちの農地が荒れ果てている様子をローラは日記に記している。

> Gosh, I'd forgotten there was such a farming country in the U.S. And my God it is a ruined country. Being sold out on taxes. Fifty of these wonderful farms now advertised for tax sale. Many already have been sold and the rest just hanging on. Will not be able to last much longer. Haven't made any profit on their farms for 10 years now.[45]

まるで恐慌の原因や農地の荒廃が税金の取り立てにあると言わんばかりの感想で、エドワーズのセリフを思い出させるものがある。

ローラは政治的内容の文章を公にはほとんど残していないが、プロの作家であったローズの著作のほうに、明らかなリバタリアニズム思想を見ることが出来る。なかでも特に注目すべきは、*The Discovery of Freedom: Man's Struggle Against*

Authority（1943）である。

自由と平等を根幹としたアメリカ独立宣言の原点は、ヨーロッパに由来を持つ王権神授説へのカウンター・イデオロギーであり、個人の権利を擁護するために、政府の権力を制限することを重視している。ローズは「私がニューディールを嫌う理由のひとつは、それがアメリカの開拓精神を殺すものだからだ」と言っている。[46]彼女の論の要点は、政府というのは力であり、それは誰も守ることはできない。他人に害を与えたものを罰するだけである。法的権利の価値は、個人を政府の力の行使から守るだけである。それゆえに開拓民は、他に例を見ないほどに自由だったのである。だからその政府に力を与えようという者たちは、愚かであるとまで言う。

> And whenever they succeed, and do increase the Government's use of force, they reduce the area of every American's free action. They decrease the productive use of energy in this country. And they weaken the only legal protection of every American's property and liberty and life.[47]

ローズにとって何より重要なのは、人々の生産性を最大限に活かす「自由」であった。従って君主制や共産主義はもとより、「大きな政府」を志向する社会主義政策にも全面的に反対であった。「計画経済が行ったことは、文明の発展を阻害することだった」と彼女は言っている。[48]

政府がニューディールを推進したとき、彼女はアメリカの根本的な価値観が崩れつつあるという危機感を持っていた。

> Human energy works to supply human needs and satisfy human desires, only when, and where, and precisely to the extent that men know they are free. It works effectively only to the extent that Government is weak, so that individuals are least prevented from acting freely, from using their energy of body and mind under their own individual control.[49]

エジソンが電気を発明したのも、アメリカに数えきれない車が生み出されたのも、すべて自由の環境がもたらしたことは、歴史が明らかにしているではないか、と彼女は主張する。この反ニューディールに心を傾けているときに、「小さな家」シリーズは改訂されていたのである。

のちにリバタリアニズムを提唱するフリードマンによれば、ニューディールによって失業者を減らし経済を活性化する「呼び水」となる公共事業は赤字を垂れ流し続け、政府支出が膨張の一途をたどるしかなくなる。[50]リバタリアンの杞憂はどうやら現実になったようだ。しかし自由市場の原理を推し進めれば勝者はますます有利になり、現在グローバル経済が地球規模にまで歯止めのない格差社会を生み出していることも現実のひとつであるが、それをローズが予測できなかったことをいま責めることはできない。「大きな政府」と「小さな政府」の選択、政府主導か自由経済かという政策の選択は一長一短のところがあり、要はバランスの問題であり、その是非は今後さらに長い歴史の審判を待たねばならない問題だ。ここで指摘するのは、ローズ（そしてローラ）が主張していることである。それは人間の可能性を最大限に活かすのは個人の自由であり、それは開拓者精神に基づくものであり、それゆえに開拓の歴史を刻む目的で書かれた「小さな家シリーズ」の根幹に据えたかったということである。

註

[1] Laura Ingalls Wilder and Rose Wilder Lane, *Little House Sampler*, (New York: Harper Perennial, 1989), 217.

[2] Caroline Fraser, *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*, (New York: Henry Holt and Company, 2017), 216.

[3] *Little House Sampler*, 93.

[4] Donald Zochert, *Laura: The Life of Laura Ingalls Wilder*, (New York; Avon Books, 1976), 206-7.

[5] "I am going to do the things I absolutely must do

before I come home. There are a few, you know, such as going over some of my copy with Rose." (September 15, 1915), *West from Home: Letters of Laura Ingalls Wilder*, ed. by Roger Lea MacBride, (New York: Harper & Row Publishers, 1974), 54.

[6] "What I am trying to do is give you the benefit of these ten years of work and study [in her own writing career]. I'm trying to train you as a writer for the big market" (November [?]1924), *Little House Sampler*, 137.

[7] ローズは母親の執筆の手伝いをしたことを否定しているが、ローズが "Pioneer Girl" の草稿の全体にわたって書き込みをしていること、「小さな家」シリーズを編集するにあたって母親と激しいやりとりをしている手紙が発見されたことは、近年下記の本の出版によって明らかになった。Laura Ingalls Wilder, *Pioneer Girl: The Annotated Autobiography*, ed. by Pamela Smith Hill (Canada: South Dakota Historical Society Press, 2014), *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*, ed. by William Anderson, (New York: Harper Collins Publishers, 2016).

[8] *Pioneer Girl*, 1.

[9] Laura Ingalls Wilder, *Little House in the Big Woods*, (New York: Harper & Row Publishers, 1953[1932]), 1.

[10] *Prairie Fires*, 318.

[11] *Pioneer Girl*, 16.

[12] *Little House in the Big Woods*, 184.

[13]「小さな家」シリーズが有名になってのち、この物語が事実であるのかどうか、数多くの検証がなされ、様々な事実との齟齬が指摘された。まず 60 歳を過ぎてから、小さな頃の思い出を綴るのであるから、思い違いがあるのは当然のことである。次に「創作」の疑いであるが、ローズはそのような指摘に対して「母の作品がフィクションではないかと非難されているが、あれは事実であり、事実だけなのであり、何も作り話は加えられていない」と強く否定している（*Prairie Fires*, 492 を参照）。草稿が明るみに出たことによって、シリーズはローズによる改編が行われ、さらに創作部分が存在していることも明らかになってしまったのであるが、当初ローズが協力していることは隠していたということ、そして本質的な筋立てはローラの実際の思い出に基づいているのだと言いたかったのであろう。

この髪の毛のエピソードについても、父親が自分の髪の色も同じ茶色だと実際に言ったか言わなかったかは大きな問題ではなかろう。

[14] *Pioneer Girl*, 147.

[15] *Pioneer Girl*, 227-9.

[16] *Pioneer Girl*, 256.

[17] *Pioneer Girl*, 257-9.

[18] ちなみにローラに振られたアーネストという青年は、傷心のまま長く独身で暮らしたと "Pioneer Girl" には書かれているが、ヒルの調査によれば彼はそれほど時を経ずに結婚していたという記録が残されている（"Pioneer Girl", 259）。登場した人物すべてを実際に調べ上げる批評家の執念にも感心するが、有名になったあと、そういった詮索はローラもレインも嫌がっていたことを記しておきたい。

[19] *Pioneer Girl*, 140-141.

[20] 篠田靖子『アメリカ西部の女性史』、明石書店、1999 年、144.

[21]『アメリカ西部の女性史』、49.

[22] *Pioneer Girl*, 41.

[23] From Laura to Rose, June 1, 1939, *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*, 206.

[24] From Laura to Rose, March 7, 1938, *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*, 166.

[25] Laura Ingalls Wilder, *The Long Winter*, (New York: Harper & Row Publishers, 1953[1940]), 4.

[26] *The Long Winter*, 33.

[27] Laura Ingalls Wilder, *Little Town on the Prairie*, (New York: Harper & Row Publishers, 1953 [1941]), 90.

[28] *The Long Winter*, 69-70.

[29] *The Long Winter*, 78.

[30] *The Long Winter*, 134.

[31] *The Long Winter*, 83.

[32] Laura Ingalls Wilder, *Farmer Boy* [1933], (New

York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1961), 370-1.

[33] Laura Ingalls Wilder, *The First Four Years,* (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1971), xiv. 序文に書かれているが、この草稿を受け取ったのはローズの友人である Roger Lea MacBride であった。

[34] *The First Four Years,* 3-4.

[35] *The Long Winter*, 13.

[36] *The Long Winter*, 258-9.

[37] *The Long Winter*, 305.

[38] *The Long Winter*, 277.

[39] *Prairie Fires*, 97.

[40] *Prairie Fires*, 77.

[41] Laura Ingalls Wilder with a setting by Rose Wilder Lane, *On the Way Home*, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1962), 1-2.

[42] Anita Clair Fellman, *Little House, Long Shadow*, (Columbia: University of Missouri Press, 2008), 65.

[43] *The Long Winter*, 99-100.

[44] *The Long Winter*, 112.

[45] Laura Ingalls Wilder, "The Road Back" [1931], *Little House Traveler*, (New York: Collins, 2006), 301.

[46] *Little House, Long Shadow*, 97 を参照。

[47] Rose Wilder Lane, *The Discovery of Freedom: Man's Struggle Against Authority*, (San Francisco: Fox & Wikes, 1993[1943]), 207.

[48] *The Discovery of Freedom*, 38.

[49] *The Discovery of Freedom*, 224.

[50] Milton Friedman, *Capitalism and Freedom*, (Chicago: The University of Chicago Press,1962), 75-6.

参考文献

Anderson, William T. Laura's Rose: *The Story of Rose Wilder Lane*. *South Dakota*: The Laura Ingalls Wilder Memorial Society, 1976.

Fellman, Anita Clair. *Little House, Long Shadow: Laura Ingalls Wilder's Impact on American Culture*. Columbia: University of Missouri Press, 2008.

Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*. New York: Henry Holt and Company, 2017.

Friedman, Milton. *Capitalism and Freedom*. Chicago: The University of Chicago Press,1962.

Lane, Rose Wilder. *The Discovery of Freedom: Man's Struggle Against Authority*. [1943] San Francisco: Fox & Wikes, 1993.

Wilder, Laura Ingalls. *Little House in the Big Woods*. [1932] New York: Harper & Row Publishers, 1953.

-------. *Farmer Boy*. [1933] New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1961.

-------. *Little House on the Prairie*. [1935] New York: Harper & Row Publishers, 1953.

-------. *On the Banks of Plum Creek*. [1937] New York: Harper & Row Publishers, 1965.

-------. *By the Shores of Silver Lake*. [1939] New York: Harper & Row Publishers, 1953.

-------. *The Long Winter*. [1940] New York: Harper & Row Publishers, 1953.

-------. *Little Town on the Prairie*. [1941] New York: Harper & Row Publishers, 1953.

-------. *These Happy Golden Years*. [1943] New York: Harper & Row Publishers, 1971.

-------. *On the Way Home*. With a setting by Rose Wilder Lane. New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1962.

-------. *The First Four Years*. New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1971.

-------. *West from Home: Letters of Laura Ingalls Wilder San Francisco 1915*. ed. by Roger Lea MacBride. New York: Harper & Row Publishers, 1974.

-------. *Little House in the Ozarks: A Laura Ingalls Wilder Sampler: The Rediscovered Writing*. ed. by Stephen W. Hines. Tennessee: Thomas Nelson, Inc. 1991.

-------. *Little House Traveler: Writings from Laura Ingalls Wilder's Journeys across America*. New

York: Collins, 2006.
-------. *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist: Writings from the Ozarks*. ed. by Stephen W. Hines. Columbia: University of Missouri Press, 2007
-------. *Pioneer Girl: The Annotated Autobiography*. ed. by Pamela Smith Hill. Canada: South Dakota Historical Society Press, 2014.
-------. *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*. ed. by William Anderson. New York: Harper Collins Publishers, 2016.
Wilder, Laura Ingalls and Lane, Rose Wilder. *Little House Sampler: A Collection of Early Stories and Reminiscences*. New York: Harper Perennial, 1989.
Woodside, Christine. *Libertarians on the Prairie*. New York: Arcade Publishing, 2016.
Zochert, Donald Laura: *The Life of Laura Ingalls Wilder*. New York; Avon Books, 1976.
篠田靖子『アメリカ西部の女性史』、明石書店、1999 年